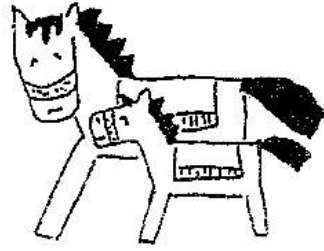


♪  
お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポックリ、ポックリと

29年 5月 NO.270



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

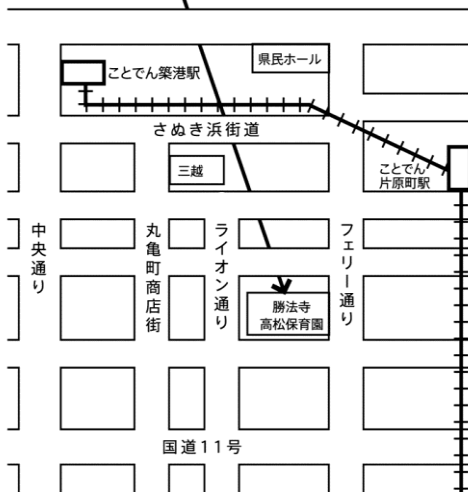
(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		5月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
5月 13日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。
5月 19日	金	おはなしの会 10:00～11:30	「春をさがそう」をテーマに大型絵本や ペープサート、わらべ唄などを楽しめます。
5月 20日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も保育体験に おいで下さい。
5月 20日	土	絵本と小物づくり 14:00～16:00	びっくりペープサートをつくります。子育て にも役立つので、どなたでもどうぞ。
5月 24日	水	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	吉岡嗣人氏（高松少年鑑別所統括 専門官）に現代の犯罪について話して いただき、フリートークをします。
5月 24日	水	健康と子育て相談 11:00～12:00	園医師（小児科医）にゆっくり 相談できます。（予約要）

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して  
いますので、親子でご来園下さい。  
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談（月～土）9:00～18:00  
しつけや子育てについての悩み、保育園生活  
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ全集②  
「美しい町・下」より

つ つ じ  
小山のうえに  
ひとりついて  
赤いつつじの  
蜜（みつ）を吸う。  
どこまで青い  
春のそら、  
私はちいさな  
蟻（あり）かしら。  
あまいつつじの  
蜜を吸う、  
私にくるい  
蟻かしら。



# 「金子みすゞの詩とたましい」より—静山社文庫

酒井 大岳・文（曹洞宗長徳寺住職）

## 「木」は私たちに語りかける

### もの言わぬ木から学ぶ

私の家の近くに、樹齡千五十年の“槻つきの木”があります。一本の枝だけが生き残っていて、夏には見事な茂みをつくります。

初めてその大樹を仰いだ若いタクシーの運転手さんが言いました。

「すると、この木は千年以上も人間社会を見つめてきているんですね。こんな世の中になって、この木はいま悲しんでいるんじゃないでしょうか」

私は驚きました。若い運転手さんからこういう言葉を聞こうとは思っていなかったからです。

「そうですね。そのとおりです。木は何も言わないけど、たぶん言葉を持っているんでしょうね。その言葉を聞きとめる人がだんだん少なくなってきて、木はそれを悲しんでいると思います。

一本の枝だけ枯れないでいるのは、私たちにそのことを気づかせたいためでしょうか…」

そう言ったあと、私はみすゞさんの「木」を思い、恥ずかしくなりました。説教じみた言いようだったからです。



お花が散って

実が熟（う）れて、

その実が落ちて

葉が落ちて、

それから芽が出て

花が咲く。

そうして何べん

まわったら、

この木は御用（ごよう）が  
すむかしら。



「御用」がいいですね。

一本の木を見てこのような言葉が浮かんでくるのは、その木を敬<sup>うやま</sup>っているからでしょう。

でも敬いの念を起こす前には、その木への思い入れがなければならぬはずで、みずさんは四季折々の一本の木の变化と生きざまを、何十年も重ねて仰いでいるのだと思います。

そうして、いつになったら御用がすむのかと敬いの心を寄せました。

こう言われてみると、私たちがこうして生きているのも、何か御用があつて、はるかな世界からやって来ているのだと、考えないわけにはいきません。

この詩を読んだ人は、きっと自分の人生途上における御用とは何であろうかと考えたことでしょう。

木を詠んだ詩人はたくさんいます。むしろ、詠まない詩人のほうが少ないくらいでしょう。

それはまず、木がだまっているからだだと思います。風雨にさらされた相<sup>すがた</sup>を恥じることは木にはありません。それを見て、人間はまた木から教えられるのです。

木は何も言わないけれど、見る人が見ると、たくさんの言葉を持って、私たちに語りかけてくれています。

### ととの 大樹の下でこころを調える

私の家は「なら山」を背負っています。こがらしが吹くころになると、ならの木たちは申し合わせたように枯葉を交換し合います。自分の落とした枯葉ではなく、よその木の枯葉をいただき、それを肥料として成木になっていくのです。

しかし、柿や椿<sup>つばき</sup>は別です。かれらは自分の足もとに自分の葉を落として、それを肥料として育ちます。

そのために葉は厚く重く、自分の足もとに落ちるようにできているのです。

木が枯れてしまわないかぎり、こうした努力をしている木々たちを大切にしたいと思いますね。

まだまだ御用がすまないで一生懸命生きている木を見ると、人間の生活によほど邪魔をしてこないかぎり、その技さえも切ることができません。



宇宙物理学者の<sup>さじはるお</sup>佐治晴夫先生は、「なぜ木を切ってはいけないのか」という質問に対してこう答えられています。

「私たちの肺は酸素を吸って、二酸化炭素をだすでしょ。

その二酸化炭素を吸って、木は酸素をだしてくれるでしょ。

つまり、“木は私たちの外にある、もう一つの肺”なのです。

ですから木を切るという行為は、自分で自分を傷つけることになるでしょ。

だから、木を切ってはいけないのです」

仏教で「<sup>じゆ</sup>樹」といったら「<sup>ぼだいじゆ</sup>菩提樹」のことです。別名で「<sup>どうじゆ</sup>道樹」「<sup>かくじゆ</sup>覚樹」ともいいます。

お釈迦さまがその樹の下で悟りを開かれたから、そういつているのです。

インドではヴェーダ（バラモン教の聖典）以来、神聖な霊力がある樹とされてきました。

その樹の下に坐し、その樹と呼吸を合わせ、その木の魂を自分の魂とする、つまり木のころと一つになるということが、悟りそのものであると考えられていたのです。

ですから、大樹の下に立って、しばし呼吸を調えるということは、そのままころが調うということで、すばらしいことなのです。



あかるい日なぞ

大きな木のそばへ行つていたいきとする

詩人、<sup>やぎじゆうきち</sup>八木重吉がこう言ったのも、そうすればころの安らぎが得られると思つていたからでしょう。

「<sup>じゆげりようふう</sup>樹下涼風」

私の<sup>たんてん</sup>丹田（全身の精気が集まる<sup>へそ</sup>臍の下のあたり）にこんな言葉がいつの間にか座り込んでいて、色紙に書いたりしています。

お釈迦さまの教えがさわやかだからです。

